

被災経験から見える受水槽の耐震性の重要性

鋼板製一体型水槽であれば「命の水」を確保できます

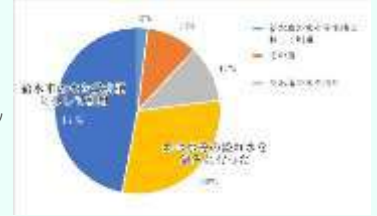
災害時において生命維持に必要な水量（飲料水）は「9L」とされます

※1日に必要な水量 3L ×公的救助が行われるまでの3日間 = 9L

しかし災害時は飲料水だけでなく、トイレ（使用可能な場合）や衛生対策などに使う「生活用水」も必要となるため、実際は9Lに限りません

では、具体的に災害時に水をどのように確保しているのでしょうか？

阪神淡路大震災直後の被災者アンケートによると
水を確保した方法として最も多かったのが、**受水槽を、貯水槽として利用するだけでなく、給水車の給水拠点として活用した方法**でした。



受水槽が破損漏水してしまうと、給水車の支援が受けられません

災害時は広域で断水する可能性がある為、

自治体で保有する数少ない給水車では支援を賄えきれません

受水槽を有効利用することで、給水支援を格段に効率化できるだけでなく

1台800万円以上する給水車を複数台購入するコスト的負担を抑えることが出来ます



給水車から避難所へ配水する為、一ヶ所の施設にとどまる給水車・・・



各施設に受水槽があれば、給水車が一ヶ所にとどまることなく
複数地点に巡回することができる

ちなみに...

ペットボトル貯蓄は避難施設には適さない理由

受水槽を設けずともペットボトルで賄えるという考え方も

あると思われませんが、避難施設においては向きません。

↓

ペットボトルの水の貯蓄をメインに避難するとなると

莫大な費用+貯蓄スペースが・・・

仮に2.0m3の水が入った受水槽があったとすると
その効果は・・・

- (1) 2m3の給水車が10台分
- (2) 約3リットルの水
(1人が1日に必要とする最低給水量)
1000人分×7日間
- (3) 水をペットボトルで購入した場合は
1リットルを100円とし計算すると
2.0m3では200万円となります
本数に置き換えると=2000本 ※貯蓄スペースも必要

水道水ならば10m3は約1000円
→ 1リットルに換算すると0.1円
→ 水をペットボトルで購入した場合の1000分の1の費用で済みます

「災害時に壊れない」受水槽の設置は肝要であり、
東日本大震災を含む過去の災害において、一件も破漏水事例のない
鋼板製一体型受水槽は、避難施設に適する防災強化設備と考えます。